

奈良薬師寺執事

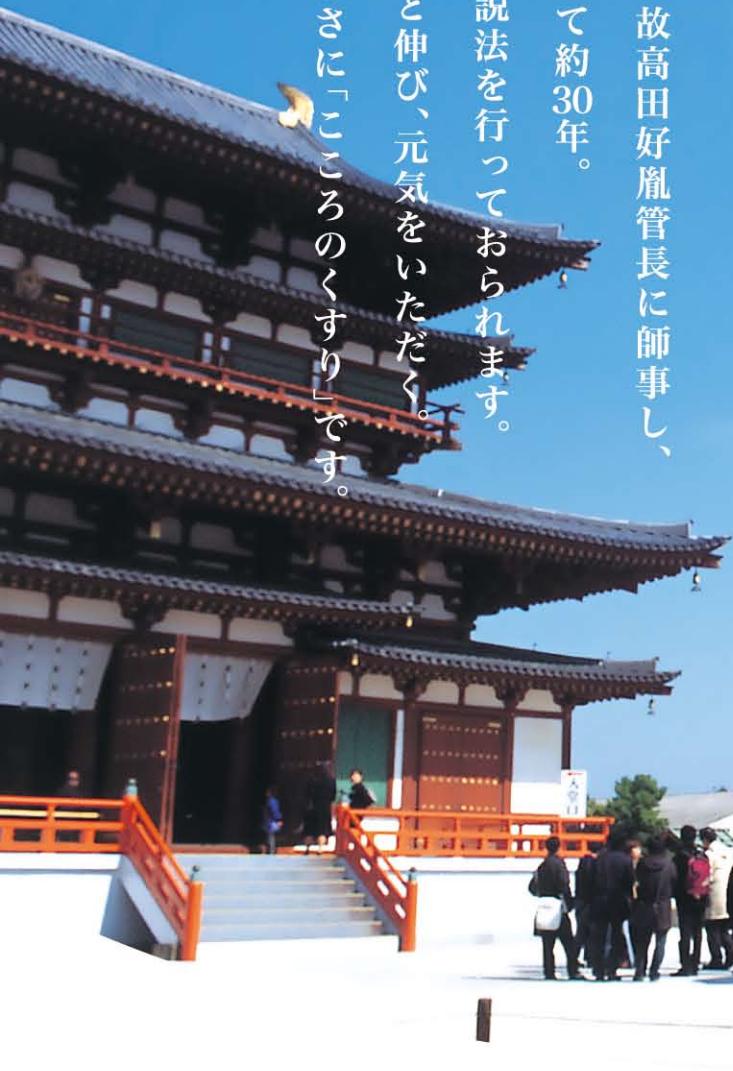
大谷 徹奘さん

おおたに

てつじょう

「出ていけ!」という
師匠の言葉を待っていた

よっぽどの縁。



17歳で奈良薬師寺の故高田好胤管長に師事し、
薬師寺の僧侶となつて約30年。

現在は、全国各地で説法を行つておられます。
聴けば、背筋がピンと伸び、元気をいただけます。
徹奘先生の言葉はまさに「こころのくすり」です。

私の師匠・故高田好胤薬師寺管長は、仏の道では名の知れ渡つたお方であり、私にとつて憧れの存在でした。テレビ出演する著名人でありながら、デパートの靴売り場などにも法話に出かけ、人々を魅了してしまう師匠を、子供ながらに「かっこいい」と思いました。そして自分もお坊さんになろうと決心し、17歳で弟子入りしたのです。でも薬師寺の修行は地味で辛く、何度も「逃げよう」「やめよう」と思つたか。「師匠は大好きだけど、寺の環境は大嫌いだ」と毎日、思いながら生活をしていました。薬師寺は東京に別院があり、師匠の随行で東京へ行くようになると、夜に寺を抜け出しては飲み歩くようになりました。今の私はお酒もお肉もいただきませんが、当時はずいぶん深酒もしました。翌朝は酒の臭いがぶんぶん残るほどでした。私は逃げ出す根性がなかつたので「出ていけ!」という言葉を待つていたのです。ある朝、いつにもましてひどい二日酔となり、割れるような頭痛の中で「今日こそ私を寺から追い出してくれるだろう」と思つていると、師匠は静かにこう言われました。

「寝とけ、徹奘。しんどそうだから」。

師匠はすべてお見通しだったのです。このとき師匠に憧れて僧侶の道を選んだことを思い出し、もう逃げ出そうとするのはやめよう。心を入れ替え薬師寺で生きていく。そう決心しました。しかし本当の辛い修行はここからでした。

「よつぽどの縁」 いちばんの相手は 自分自身。

縁があったから
今こうして生きている

薬師寺の若い僧侶は「四度加行※（しどけぎょう）」という厳しい修行をしなくてはなりません。小さ

な行場に閉じこもり、65日間、仏様とだけ対峙し、ひたすらお経をあげるものです。肉体的にも精神的にも非常にきついものでした。人は辛い環境に身を置かれるとき、イナス思考に走るそうですが、あの人も非常にきついものでした。「なぜこんなことしなきゃいけないのか」と修行を否定し、「坊主になんかならなきゃよかった」と僧侶を否定し、「こんな寺にこなきゃよかつた」と薬師寺を否定し、さらに「仏様、あなたさえいなければこんな苦しい思いをしなくてすんだ」と仏様まで否定しました。まさにかたから、今こうして生きているのだと。そう思つたとたん、倒れたドミノが次々と立ち上ってきました。すべては「よつぽどの縁」。そして「よつぽどの縁」のいちばんの相手は自分。私という存在に出会つたことを歓びてこそ、人との出会いも歓べるのだと気づかされました。

今すぐできる
「幸せの3か条」

私は全国各地のいろいろな場所でお話をさせていただいています。企業、学校、刑務所、老人ホーム、幼稚園…。どこでも、誰に対しても、伝

かざす方がいますが、それは「いぱり」につながり、やはり人は近寄ってはきません。そして、3つめが「笑顔でありがとう」。人はつい周りへの感謝を置き去りにしてしまいます。「女房だから家を守つて当たり前」「社員だから働いて当たり前」「社長なら責任をとるのは当然」と。しかし、本当はすべてはおかげなのです。感謝なのです。家族のおかげ、会社のおかげ、社員のおかげ、社長のおかげ…。そして、その感謝の心を笑顔と「ありがとう」の言葉で伝えられるか否かで、幸せを引き寄せられるかどうかが決まります。



徹奘先生の法話には、老若男女さまざまな人が集まり、熱心に耳を傾ける。



幼稚園児を相手に、わかりやすい言葉で説法を行なう。

否定のドミノ倒しです。そして最後にとうとう、人間としてやってはいけない自分の命の否定をしました。「生まれてこなければよかつた」と。あまりに苦しい修行で、極限状態まで追いつめられながらお経本を読み上げていたとき、突然、ある3文字が明るく照らし出されたように浮き上がりてみえました。

「歓宿縁（かんしゅくえん）」。これは宿つている縁を歓びなさい、という意味です。私ははつとしました。ああそうか、縁があつたから、今こうして行場にいるのだ。縁があつたから、今こうして生きているのだと。そう思つたとたん、倒れたドミノが次々と立ち上ってきました。すべては「よつぽどの縁」。そして「よつぽどの縁」のいちばんの相手は自分。私という存在に出会いも歓べるのだと気づかされました。

えたい話の基本は同じです。そのひとつが「幸せの3か条」です。人にとって幸せの根本は「人と仲よく生きていくこと。家庭、会社、学校、どこでも人間関係に恵まれれば、人生はほぼうまくいくものです。

私がいつもお話しする「幸せの3か条」とは「怒るな、いばるな、笑顔でありがとう」の3つです。まず「怒るな」。ある老人ホームを訪問したとき、いつも腹を立て文句を言つている90歳のおばあさんがいました。入園者は誰も近づかず、職員さえ必要なとき以外そばに行きません。おばあさんは自分が嫌われていること自体に腹を立て、職員たちに思つています。

できません。でも、いつの間にか私たちは、自分を特別だと思い込んでしまい、自分を支えてくれているものを見忘れたり、見下したりしています。それでは幸せはつかめません。心を静かにして「生き自分」と同時に「生かされている自分」とともに生きていきたいと私は思つています。



じんが
自分で
育てて
ますか
いばる
【P17】

飾らない言葉に魂が宿る「徹奘語録」。

こう言いました。「世話ををして給料をもらつてるんだから、自分たちが食わせてやつてるも同然だ。みんなと同じように私の世話をしろ」と。こういう言葉を吐く人を愛せるでしょうか。人が近寄らないのは当たり前。おばあさんの孤立は深まつていきました。若いころから怒りっぽい人はどうか注意してください。次に「いばるな」。老人ホームの人園者の中には「自分は特別だ。人とは違うのだ」とプライドを振り

P15で「静思のススメ」
好評連載中!
大谷 徹奘さん
TETSUJYO OTANI

1963年東京生まれ。17歳で薬師寺の故高田好胤管長に師事、薬師寺の僧侶となる。龍谷大学文学部仏教学科卒業後、同大学院修士課程修了。現在、薬師寺執事・兼・薬師寺東関東別院・潮音寺副住職。著書に『自分で選んだ道なのに』『こころの薬』『愛情説法』走る!など。本誌「静思のススメ」好評連載中。



僧侶としての出発点である奈良薬師寺。

※四度加行（しどけぎょう）／内容が四段階に分かれている密教の僧行

トピラ・P3右下写真／坂井 信彦